危機・先人に学ぶ

やさしい経済学

マーシャル ❷ 市場をうまく使う

京都大学教授　矢野　誠

マーシャルと言われて最初に思いつくのは、その著書「経済学原理」で展開された需要曲線と供給曲線による市場の分析手法である。出版以来120年以上の間、この手法はそれぞれの時代の経済問題の分析と解決に役立ってきた。しかし、今我々が学ぶべきなのは分析手法ではなく、彼の経済学を支えた思想だと思う。

マーシャルの本が書かれたのは、第2次産業革命直後の「大不況」と呼ばれた時代（1873～96年）である。この不況は73年、ドイツが通貨と銀の兌換（だかん）を停止したことをうけ、銀価格が崩落したことをきっかけとしている。米国では、北部大陸横断鉄道の建設を推進していた大銀行が倒産に追い込まれ、鉄道建設への過剰投資が顕在化した。英国は「大不況」の期間を通じて倒産、失業に悩まされ、国際市場における優位性を失った。

「大不況」の時代のように経済がうまく行かなくなると、市場否定の風潮が生まれがちである。しかし、そのような時こそ「市場は良いものだ」ということを再認識する必要があるという主張を「原理」から読み取ることができる。

現在はマーシャルの時代とよく似た状況にある。IT（情報技術）革命の後、2000年のITバブルの崩壊、08年の世界金融危機、最近の欧州危機とみてくると、市場がうまく機能しているとはとても言えない。日本経済も同様で、原発事故もあり、1990年代初めからの長期停滞の深刻化に苦悩している。

筆者は10年ほど前に、日本社会の問題は「市場の質」の低さに起因すると考え、どのようにしたら、より良い市場が形成できるかという問題を提起した。それと同じ問題意識に立つのが「原理」であるとみることもできる。

よく「ハサミは使い方次第」といわれる。市場も同様で、使い方を誤れば、いろいろな問題を生じさせる。しかし、うまく使えば社会に大きな潤いを与えてくれる。では、どうしたら市場をうまく使いこなせるのかを考えよう、というのがマーシャルと筆者に共通する問題意識だと言える。

現代とマーシャルの時代は違う。だが、豊かで明るい経済を実現するために、混迷の時代を生きた彼の思想から学ぶものは大きい。

掲載日　2012年06月20日　日本経済新聞朝刊　029ページ

(C)日本経済新聞社　無断複製転載を禁じます。